



月光ほろほろ

芋焼酎のおっさん

ポーン・ポーン・ポーン・・・

居間の大きな振り子時計の鐘の音が、小さな家の中に鳴り響きました。

明日遠足の小さな娘達は興奮して、布団の上で幾度もでんぐり返しをしながら奇声を上げていました。

「お前たち早よ寝らんか、明日起きれんど」

「いやじゃ、まだねむうない！」 「とうちゃん、おうまになれ！」

「だめやって、もう・・・じゃあ、お話をしてやっから布団に入れ」

「なんのおはなしや？」

「そうやのう・・・父ちゃんがガキン時に、ばあさまから聞いた『闇ごんご』というおばけの話
をすっか」

「やみごんご？」

「おお、『闇ごんご』はひんの間明るいうちはよ、裏のどんぐり山の奥深くにある大きな椎木の
ほこらに隠れておっ

てな、夜になっと里の明かりを目指して、バッサバッサとコウモリのごつ飛んで来っとよ。そ
して明かりの点いとる家の窓にペタリとビキタンのごつ張り付いて、中の様子を大きな目玉でギ
ョロギョロ見とるんじゃと」

「なんでや？ なにすっと？」

「それはな・・・『闇ごんご』は童子の柔らかい目玉が好物で、目玉に麦わらをプスッと挿
してチューと吸い取ってしまうちゃが」

屋敷林の間を吹き抜けて来た風が、窓ガラスをカタカタと鳴らしました。

「ほら、『闇ごんご』が来たじ！ はよ目を閉じれ！ 寝ない子は誰じゃ・・・目の開いている
子はおらんか・・・」

小さな娘達は口をへの字にし、眉間にシワが出来る程強く目を閉じました。

「とうちゃん・・・おじいが・・・」

「大丈夫やが、父ちゃんが見張っとるが。明かりを消すぞ、はよ寝れ」

カチ・カチ・カチ・・・

居間の大きな振り子時計の針の音が、ここまで聞こえて来ます。

カタカタと音を立てる窓ガラスからは、煌々とした月明かりが差し込んでいました。

「・・・寝たか？・・・」

「・・・ねたじ・・・」

「・・・寝ろ・・・」

「・・・プ～・・・」

「・・・誰や？・・・」

「・・・ふふふ・・・」

「・・・はっはっはっ・・・」

ゾワワゾワワゾワワ・・・

煌々とした月明かりは屋敷林の影を黒々と地面に刻み込み、枝葉の擦れ合う音が小さな家を包み込んでいます。

里山の斜面を雛壇のように埋め尽くす棚田にも、美しい月が映り込んでいました。

屋根の上では、田の神さあ、うぶすな神、玉依姫、そしてこの家の茶釜や硯、提灯といった付喪神達が、蒼く輝く月を愛でながら甘露を酌み交わしていました。

「闇ごんごよ、ぬしは人の子の目玉を喰らうのか？」

「うぶすな神、滅相もない！ わっちはそんな恐ろしげな事、一度たりともした事はありませんぜ」

「いやいや、恐ろしげな面構えのぬしの事じゃ、喰っとる、喰っとる」

ここぞとばかりに、付喪神達がわいわいとはやし立てます。

「はっはっはっ、よさぬかお前達。 すまぬな闇ごんごよ、酔余の戯言じゃ」

気持ちの収まらない闇ごんごは、ギョロギョロとした大きな目玉で、付喪神達を睨みつけています。

田の神さあは杯を手にしたまま、コクリコクリと船を漕いでいます。

玉依姫は袖で口元を押さえつつ、空になったうぶすな神の杯に甘露を注ぎますと、杯の中にも小さな月が宿りました。

「今宵の月は格別に美しいのう。 そして美しい里山じゃ・・・」

うぶすな神は目を細め、蒼く輝く月を鏡のように写す棚田の間に、ポツポツと明かりの灯る里山を愛おしげに眺めておりました。